

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第十三主日(8/15)礼拝

「僕となった真の王」

イザヤ書53章・ルカ福音書第23章32節から第23章39節

【聖書】

ルカによる福音書23:32ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。33「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。34「そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。35民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」36兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、37言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」38イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。39十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」

1 過去の罪と将来の死

今日8/15は76回目の敗戦記念日。大日本帝国が中国大陸で始めた侵略戦争が無条件降伏という結果に終わった日です。あれから76年経つというのに、日本という国にとって、太平洋戦争は過去のものとはなっていません。韓国や中国との間には、徴用工問題や従軍慰安婦問題がくすぶり続け、本屋の店先には、韓国、中国を貶めるヘイト本がうず高く積みまれています。戦後76年間を通じて、侵略戦争の被害者である中国や韓国と加害者である日本が本当に和解したことがあだろうか、日本はあの戦争の加害責任と真摯に向き合ったことはあるのだろうか、中国や韓国の権力者達は、日本の戦争責任を政治利用していないだろうか。敵となってしまった同士が赦し合うことの難しさに呻きます。戦争という大きな罪は、私達の深い根源的な所を損ない、世代を超えて続くのだと思わされます。

いえ、戦争だけじゃない、国だけではない、私達の生活も様々な罪で満ちています。幼児虐待、ネグレクト、いじめ、レイプ、パワハラ、セクハラ、様々な差別。人間を人間扱わない罪を生み出すのは、憎しみ、無関心、支配欲、その根本には、全ての人が免れない自己中心的な思いがあります。

ある牧師の話です。一人の若者が教会に繰り返し電話をかけて来るように

なりました。彼はいじめを受けた記憶を繰り返し牧師に語るそうです。牧師は、何十回と同じ話を聞くうちに、彼が訴えていることに気づいたそうです。「私が今生きるのがこんなにつらいのも、社会にうまく適応できないのも、自分で自分を受け入れられないのも、子ども時代に自分をいじめた奴のせいだ、見て見ぬふりした教師のせいだ、一緒にかかったクラスメートのせいだ。自分は、この記憶から抜け出せない、憎い、辛い、苦しい、生きていたくない、助けて欲しい。」昔の記憶に苦しみ、人と接することが怖くなり閉じこもった若者。自分を受け入れられずに苛立ち、苦しみ、家族に攻撃的になり傷つける。そして、自己嫌悪の中、牧師の所に電話をして来ているようです。この話しを聴いて、人の罪は、人の人生を深く損なうのだという思いを深くしました。

それは、被害者だけではない、加害者も同じ。人を人として扱わずに傷つける事は、本人が気づかないまま、いじめる本人をも傷つける。聖書の言葉で言えば、神がご自身に似せて造られ、神の息を吹き入れた所、人が人である所の根源的なものを損なっていく、獣のようになっていくのだと思います。更に悪いことに罪は伝播する。人の罪に深く傷ついた人がやがて他の人を傷つける者となる、被害者が加害者となる。罪の感染力は、新型コロナ以上。社会を覆い、からみついて解きがたい。罪に傷ついた過去、人を傷つけた過去が、私達を深く捕えています。

その一方で、私達は、確かな未来も持っていません。私達全員に必ず訪れる未来、それは死。全てを空しくする死です。まさに「死んだらおしまい」、未来はありません。だから、私達は、「今だけ、金だけ、自分達だけ」と罪に生きてしまいます。ある方は、「人が絶望しない理由がない」と言っていました。真実であると思います。

私たちが、神に造られた喜びの命を生きるには、過去の罪から解き放たれ、確かな未来が与えられる必要があります。

2 罪と死を打ち砕く十字架

そんな人間の罪とその罪からの救いを物語るのが聖書。聖書のうちでもイエス・キリストを描いた四つの福音書には、主が十字架に架けられた場面を描いていますが、みなそれぞれに異なります。中でもルカ福音書の記事は、実に簡潔に十字架につけられる場面を記しています。ルカの十字架理解が現れています。いえ、それはルカだけの理解ではない、ルカが仕える教会の信仰であった、という人がいます。その通りだと思います。迫害の中時に命の危険に怯えつつ、生きる事の苦しみの中、痛みの中、ルカと仲間が見上げた十字架がここに描かれている、ルカは、その十字架を伝えるとき、どうして

も書かなければいけないことだけを書いたのだと思います。だから、このテキストの内に、主イエスを尋ね求めるとき、主の十字架の持つ深さに打たれるのです。

この事を今回、しみじみと感じました。私は、今まで、「人はみな罪人です」と数えきれないくらい語って来たのですが、しかし、今回ルカ福音書第23章のテキストから、どれほど罪と死が自分の生活の中に深く入り込み根を張っているか、はっきりと示された思いであります。大げさでも何でもなく、私が気づかないほど私の内に罪が深く食い込み、死が支配しているのだ、と。私がよい者になろうと努力しなかったわけではありません。しかし、信仰の努力をすればただけ、自分の信仰を誇ろうとする気持ちも湧く、めぐみを受ければ高ぶってしまう。罪は悪魔的で、信仰をさえ糧として肥え太ろうとする。「何と私は惨めな者だろうか！」という使徒パウロの嘆きは、私達信仰者の真実の嘆きです。ですが、このように罪の深さに気づけるのは恵み、イエス・キリストの恵みです。私達は、十字架の主イエスがいるからこそ、罪を受け入れ、向き合う事ができます。だから、使徒パウロは、「なんと惨めか」と嘆いた直後に「イエス・キリストを通して神に感謝する、」と語りました。何故なら、「イエス・キリストが罪と死の法則から解放してくれたから」。私達が、十字架上に釘付けされたイエス・キリストと出会う時、私達を深いところで根源的に捉えている過去の罪と未来の死が打ち砕かれ、罪と死から解放が起きるのです。そうして、過去を過去として葬り、未だ来ないが必ず来る未来、将来に向かって希望を持ち、今を生きる事ができます。

そして、私達が味わう、このイエス・キリストの十字架による根源的な解放は、誰もが共通に経験できるものです。世代の違いも、男女の別も、戦争の勝利者、敗北者も、罪を犯された者も犯した者も、金持ちも貧乏人も権力者も庶民も共通に知ることができるものです。私達を根源的に罪から解き放つ主イエス・キリストの十字架を十二分に味わい、死を打ち砕いた復活のいのちを確信するのです。

3 自分を救わない救い主

どうしても書かなければならない、と記されたルカ福音書の中で、三度、繰り返される言葉があります。「自分を救ってみろ」という言葉です。イエスが釘付けられた十字架が、されこうべと呼ばれる丘に立ち上がります。当時の十字架刑は、丘の上など高い場所で行われたことが多かったようです。苦しみ悶え死んでいく残酷な姿をさらしものにし、多くの人々が目にするため。今回も、まるで傍観者のように民衆は立って見つめていました。他人事

のようにイエスが十字架に釘付けられるのを遠巻きにしていました。民衆の内側には、議員たちがイエスを嘲笑っていました。35節「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」議員たちとは、ユダヤ人の達の最高法院、サンヘドリンの議員たち、イエスの十字架で殺そうとした人々。敵であるイエスが死にゆく姿をはしゃいで見ている様子を映した言葉。その議員たちの更に内側には、実際に処刑を行うローマ兵たち。兵士達は、十字架に釘付けられて呻く惨めなイエスをもてあそびます。兵士達がイエスに突きつけたという「酸い葡萄酒」は彼らが日常、飲んでいて、どぶろくであったと言われていています。臣下が玉座に坐る王にうやうやしく酒を献げる真似をし、素っ裸で十字架に釘付けられたイエスをユダヤ人の王に見立て、安物の酒を差し出すまねをしてからかったのです。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」と言いつつ、イエスとユダヤ人を侮辱しました。

更には、イエスのすぐ傍らで、一緒に十字架に苦しむ犯罪人の一人も「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」とののしります。十字架に架けられてもすぐに絶命する事はなく、通常、24時間ほどは十字架の上で苦しみ抜いて死ぬ死刑囚たち。十字架に架かった者達どうしで罵り合ったり、道行く人に苦しみを訴える事もあったらしいのです。十字架刑がいかにもむごたらしいものかが伺えます。だから、十字架刑についている犯罪人がイエスを罵ることも十分あり得る事です。犯罪人の一人は、まるでこの自分の苦しみの全てはお前のせいだ、お前が私を救わないせいだ、と憎しみをぶっつける断末魔のような言葉です。

民衆、議員たち、兵士達、犯罪人と、イエスの十字架との距離がどんどんと狭まっているのが印象的です。嘲り、侮辱、罵りの言葉の中心には、釘付けされているイエス。この三つの嘲笑、侮辱、罵りの言葉に共通しているのが、「自分で自分を救わない」という非難です。彼らの言葉ももつともです。メシアも王も、誰よりも力を持つ者です。自分を救い出せない者が他者を救い出せるのでしょうか。そんな者が王である筈はなく、救い主であろうはずがない。誰でもそう考えます。私だってその場にいたら思います。

当時、多くの王が自分の部下の反逆に遭って殺されていました。王が謀反にあう、戦争に負ける、そして殺されるということが頻繁に起こっていたのです。殺されるということは王でなくなるということ。兵隊たちは、そういう時、殺される王と一緒に殺されるというような馬鹿なことはせず、上手にできるだけ早く、新しいもっと力ある王に鞍替えする事を望んだに違いありません。権力とか、王とは、本来如何なるものかを誰よりもよく知っていた兵士たちが、十字架に釘付けられたイエスに向かい、「お前はちつとも王ら

しくない」と言うのは当然のことです。

4 僕となった王

しかし、「自分で自分を救わないではないか」という言葉こそ、真の神からの救い主、真の王が自分自身を救わずに十字架の上に殺される、それこそ、イエスの十字架の出来事の本質を言い表しています。神からの真のメシア、真の王は、自分で自分を救わない方、皮肉なことです。ユダヤ人の議員たちはそうとは知らず、嘲って言った言葉の内に、イエスが真の救い主である事を指し示すものがありました。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」の「神からのメシア、選ばれた者」という言葉です。聖書に通じていた議員達は、イザヤ書42章1節を意識して語ったと言われています。「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ、彼は国々の審きを導き出す。」イザヤ書42章は、後の時代に第二イザヤと暗号のような名前と呼ばれるようになった預言者がバビロン捕囚の時代に、神からの預言者としての召命を受けた時の記事です。そして、今日のもう一つの聖書テキスト、イザヤ書53章の「苦難の僕」とは第二イザヤの事を歌っている、と言われます。議員達が引用して残酷にも主をからかったイザヤ書42章冒頭は、神が選ばれた僕に神の民の真実の救いと解放が託されると詠い、「僕として仕え、神の真理による支配の道を拓く王」の到来を預言しているのです。つまり、「神から選ばれたメシア」とは、「僕となった王」なのです。

しかし、人間の王は僕となって仕えることはできません。王とは権力の頂点を極めた者であり、何者にも支配されない自由を持ち、その自由を享受する存在です。一方、僕は全く自由のない存在。ですから、王は僕にはなれない、仕える事に徹することは出来ない、僕となって敢えて死刑囚になる道など選びようもありません。それは最も王らしくないこと。王であることをやめなければ僕になれないのです。

ですが、主イエスは、ユダヤ人の王としての自由、救い主としての自由、神に選ばれた者としての自由を、この僕になること、死刑囚になること、罪人の中の罪人に数えられることに、徹底して用いられました、僕となる自由を知り、そこに生きる事ができる王、そういう王は、ここにしかいません。

そして、最も大切なことは、主イエスは十字架の上で王である事をやめられたのではなくて、まさしく、十字架の上で、私達の王となってくださっている、王としての力を私たちに奮われる、という事です。

どういふことでしょうか？最も自由な方が、罪に囚われ、未来の死に怯え

る私達と全く同じ不自由な者となってくださった。人間の王、権力の頂点を極める王にとって、僕の不自由は他人事です。ですが、主イエスは、罪の僕である私達と同じ所、いやもっともっと神から遠く離れた所へとくだり、私の代わりに十字架についてくださった。あなたの代わりに十字架についてくださった。そうして、私達罪人の真の王となってくださったのです。それは、私達の愛ゆえです。パウロは語ります。「正しい人のために死ぬ者は殆どいません。善い人のために命を惜しまない人ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに愛を示されました。」だから、使徒パウロは断言するのです。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」神の弱さが凝縮したのが主イエスの十字架。この十字架は私達の根源的に支配している罪と死に打ち込まれた神の楔のようです。

罪と死に打ち込まれた神の楔の力は、34節前半の祈りに最もよく現れています。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」彼は、自分の救いを祈り求めるのではなく、自分を釘付ける者への赦しを父なる神に求め祈る、何故そんな風に祈れるのだろうか？何故そんなことがありえたのか？

そこで、ああ、この祈りは自分の為であった、と目が開かれた時、主の十字架は自分の為であると知る、そしてこの主の愛が深い所で根源的な所で、私達をがんじがらめにしている罪と死の縄目を断ち切り解き放ち、私達を自由にする。自由と言っても欲望のままに好き勝手に生きる自由ではない。それは欲望や憎しみに囚われる不自由な生き方。主イエスの十字架が与えるのは、キリストの者としての自由、キリストの僕としての自由です。キリストを釘づけて王になろうとしていた者が、キリスト者の自由を与えられ、キリストの僕へ生まれ変わる。確かな未来を持つ事ができず死に支配されていた者が、永遠の命を与えられます。

しかし、この祈りを自分の為の祈りとして受け止めず、イエスを十字架につけて嘲っている間、イエスの十字架を軽んじている間、人間は不自由です。どうしても自由になることはできません。人は不自由のまま。この不自由がのさばり続けているから、誰もが平和を叫んでいるのに、地上に平和が来ないのです、誰もが真実な愛を求めて居ながら、愛のかけらだけでも手にすることができたとしても、結局は絶望してしまふ。人間が求めてやまない愛、平安は、この主イエスの赦しの言葉をアーメンと言って受け入れるところにしか生まれてこないのです。

しかし、いえ、だからこそ、私達はここに、主イエスの十字架のもとに招

かれたのです。主イエスの十字架のもとで、父なる神を礼拝し、この主イエスの赦しの言葉にアーメンと言える聖霊を与えて頂く。その時、私達は変わり始めます。

5 イエスが傍らにいる

さて、冒頭の牧師の話には続きがあります。ある時、その若者が牧師に電話をしてきました。家族との言い争いの途中で電話をしてきたようで、ひどく興奮して、「お前なんか死ねばいいんだ」と電話口でわめいています。耳を塞ぎたくなるような言葉。ですが、牧師は彼の言葉に聞き覚えがありました。かつて牧師自身が発していた言葉でした。親の愛に恵まれずに育ち、世を拗ねていた頃の自分が口にしていた、「死ねばいい、いなくなればいい。」その牧師もかつては、他の人に向けて毒づき、自分に向かって叫んでいた。でも、それは助けを求める声だった、「助けてくれ、救ってくれ」という言葉であった。その牧師は、偶然に行った教会で今日の聖書箇所の主イエスの祈りに射抜かれた。自分が知らずに求めていたのはこれだった、この祈りは自分の為にささげられている祈りだと思った。自分の為に祈ってくれる人がいる、自分は愛された赦された存在だった、牧師は礼拝に出るようになり、洗礼を受け教会生活を送り、召命が与えられて、神学校に進みました。

そして、牧師として教会に仕えつつ、今、かつての自分の声を聞いたのです。「死ねばいいんだ！」その時、牧師は不意に気づかされたそうです。「死ねばいいんだ！」という叫びをあげている傍らで、静かに祈っているイエス・キリストがおられる。「父よ、どうかこの者を罪の縄目から解き放ってください」イエス・キリストは、罪に呻く者達の傍らにいる為に僕となってくださった王だ！

件の電話の若者は、牧師に勧められて、気まぐれに礼拝に出たり、出なかつたりを繰り返しているそうです。しかし、若者がイエス・キリストの祈りを自分の為にささげられている祈りと受け止める日はきっとくと確信し、牧師は、若者の話に耳を傾け続けているそうです。かつての自分に教会の人々がしてくれたように、十字架の主がしてくださったように。

十字架に釘づけられつつも、罪人に仕える僕となった王、イエス・キリストは今日も働いて、自分に、他者に「お前なんか死ねばいい」と言うしかないわたしたちのすぐ側にいてくださる、神に感謝します。